

「みんなの伝道協議会」

2016年09月10日

第47回日本基督教団「みんなの伝道協議会」（旧開拓伝道協議会）が6日（火）から8日まで、仙台の「エマオ」で「どこで誰とつながるのかⅢ～3・11地震・津波・原発事故のただ中で～」という主題で行われた。現場で伝道している牧師・信徒が集まる集会なので、隠退牧師だが、参加可能かと尋ねたところ、よいとのことで参加した。私は3・11の1年後に、岩手、宮城、福島の海岸通りを案内してもらい、津波被害の凄まじい実態を見た。今回は、原発事故問題を扱うというので、ぜひ参加したいと思った。

開会礼拝では、高橋真人牧師がイザヤ書15章7節、8節の「あなたの神、主が与えられる土地で、どこかの町に貧しい同胞が一人でもいるならば、その貧しい同胞に対して心をかたくなにせず、手を閉ざすことなく、彼に手を大きく開いて、必要とするものを十分に貸し与えなさい」という御言葉から説教された。

主題講演は、宮城学院女子大学教員の新免貢先生が「アブラハム少数派—どこで誰とつながるのか—」と題してパワフルでインパクトの強い講演をされた。「開拓」は新しい分野・領域などを切り開くことであろうが、開拓精神は資本を収奪する植民地主義の発想になり、人々の精神の自由を奪う過去の事例が多々ある。伝統的な神学、規範的な教会観の下で成果主義と数値化に規定されず、振り落され、見下されている人々や捨てられている地域と出会い、不都合や弱さを補い合い、互いに人間となるきっかけを創造する伝道を目指そう。望みに逆らって望んだアブラハム少数派は「われわれは すべてを受け入れ 福音で自分を表現し 福音で人とつながり 福音で暮らしを立て 福音でお返ししてゆきたい 誰でも自分の中に かけがえのない感性と 生きる力を持っているのだと伝えたい 見た人が幸せな気分になれるような福音を 伝えてゆきたいと 願っています」という伝道を志向すると結ばれた。

「災害と教会」の公開講演では北海、兵庫、奥羽、九州教区と新潟地区、水海道教会の6人が被災の実情と支援活動などを報告された。災害を経験した人々は他の災害に対して即座に応答している。正確な情報がないと的確な支援活動ができない。支援活動を通して地域の人々との関係が深まった。災害はいつか必ず起こると思い、教区レベルで準備体制を作って置くことが大切である。集会には四十数名の牧師・信徒たちが参加し、彼らのネットワークがよいのには感心した。

翌日、福島教会に行き、飯舘村に在住する伊藤延由氏の講演を聞いた。自然豊かな地域であったが、放射能によって植物、動物が汚染されている状態を克明に報告された。私は「甲状腺がん」などの人的健康被害の実態を知りたいと思ったが、放射能との関係性は科学的に実証されていないとのことで、十分には聞けなかった。飯舘村に行ったが、至る所に黒い袋に包まれた除染物が山積みされていた。ゲートで封鎖された帰還困難地区まで行った。帰還困難地区の浪江町には車で行けた。誰も住んでいない「死の町」で、ぞっとした。しかし、帰還に備え立派な道路が作られていた。随所にモニタリングポストで放射線量を掲示しているが、低めに設定されているという話も聞いた。政府、東電は2020年のオリンピックまでには事故は収束した形にしたいらしい。文字情報では原発事故について知らされているが、現場の痛々しい現状に慄然となる。原発は命と暮らしを守るために、何としても廃棄しなければならないと改めて実感させられた。